

# 忍城の動向(享徳の乱)

享徳の乱(享徳3年(1455)～文明14年(1483))

## 黒田基樹氏

下総守(資員の子か)山内上杉に味方する。古河公方足利方の忍保を経略し、忍城を構築したか。

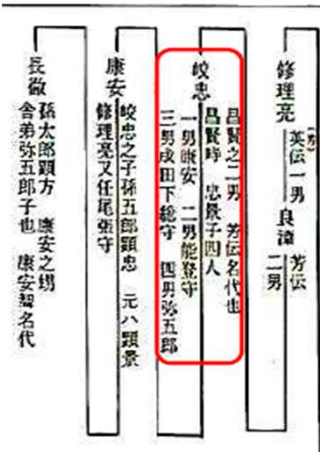
文明9年の長尾景春の乱勃発にともない、景春に味方し、景春を支援した足利方に従ったか。

文明10年、足利方と上杉方は和睦。同11年閏9月、下総守は足利方として忍城に在城(「忍城用心無油断候様、成田に可相談候」忍城の初見史料。)同年12月、忍城をめぐる「雑説」、上杉方太田道灌は久下に在陣、下総守を支援する(「成田下総守付力候」)。

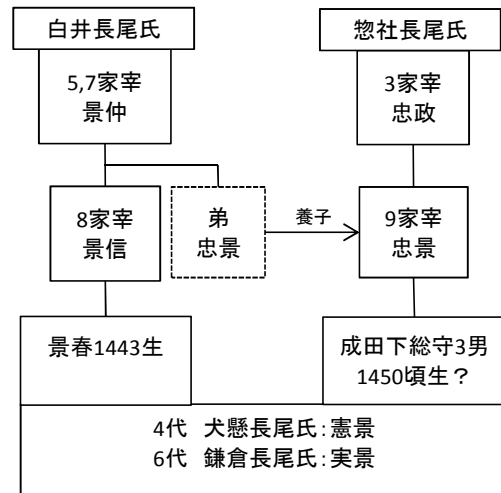
年号	内容
永享 2(1430)	道久(幸忠)讓状、譲り渡す武蔵国中条保・上江袋の郷の事、今は不知行の地たりと云えども、重代の本領たる間、..、道久甥にて候き菊王丸を猶子として、(集古文書) * 菊王丸=成田資員か
永享11(1439)	將軍義教の命により上杉憲実が足利持氏を自刃させる
永享12(1440)	「同7月1日一色伊予守引率して数多の軍共を利根川を越て乱入、武蔵国須賀土佐入道在所に放火し、須賀の家人数輩討死仕の由、早馬有ったので、同2日廳鼻性順、長尾景仲馳向て於て其の日、成田の館に伊予守と終日度々合戦す(鎌倉持氏記*1)」 * 成田氏の名は見えないが持氏側、この時に成田館は焼けて(田口新吉氏)、資員は別府に住んだか(大私部直姓成田家系図)
嘉吉元(1441)	・長井則経弟、実豊、与一色伊予守於武州成田館戦死(長井系図) ・長井実義、「母大石刑部丞光正女、号一之前、実別府之姉也」、属足利春王丸・安王丸、結城氏朝共楯籠于結城之城、有戦功討死于此城(長井系図) * 別符氏見えないが持氏側と推測
享徳 3(1454)	足利成氏は、上杉憲忠を屋敷に招き謀殺
享徳 4(1455)	・五十子張陣之始、当所三籠之城主、当方の御代官、国重白山内被差副衆、当国守護長尾孫六(忠景の親の景信(1473卒)忠景家宰)方被官、成田以下、昌賢(景仲)、同景信、被官矢野吉里為始之、... (松陰私語) * 成田氏は長尾景棟被官
享徳16(1467)	足利成氏書状、「玉井・長井・別符以下御方へ参り訳を申し上げられ候、玉井申し上げ子細雖も候、御返事及ばず候の間、参上の事、今会い無しに於いてご存じ候、御書などこれ成されずに候、其の方御談合無し、ご対面有るべからず候、殊に彼ら所帯の事、長井の庄以下其の方が下され、別符三河守に行われ候上は、誰が申し候と雖、御信用有るべからず候ので、相違有るべからず候、謹言 成氏 結城七郎殿」(別符文書:足利成氏書状:埼玉県立文書館の解釈) * 成田の名見えず
享徳17(1468)	「於上州毛呂島致合戦、勳戦功之由聞候、弥可忠節候、謹言 別符三河守殿」(足利成氏感状:別符文書) * 別符氏が成田氏の家臣であったなら、別符氏の戦功があったとしても感状は成田氏に与えられていたはず。→別符氏は成氏側、上杉側の成田氏もいた
文明3(1471)	「惣兵談於此儀者大切也、不廻日時、向彼口可有進発治定、其時之惣大将者源慶院(岩松家純)殿也、為御代官御息男兵庫頭(明純)殿・桃井讃岐守・上杉治部少輔・同名刑部少輔・武州之成田以下為先、当方二千五百余騎、向児玉塚発向、」(松陰私語) * 別符氏は成氏側、成田氏は上杉側でこの頃は受領名もなく、下総守ではなかったと思われる
文明8(1476)	6月、長尾景春、武蔵鉢形城に據りて顕定に叛き、尋で五十子の陣を襲う(史料綜覧、巻8)
文明9(1477)	・2月、道灌攻成田某所守之小机塞 (史籍雑纂3 道灌公系譜) * 小机城、別の成田氏か ・12月、古河公方方と上杉方、広馬場(榛東村)で2里の間で対陣、俄かに大雪が降り出して夜の間は合戦無し、その夜山内・扇谷両家より古河公方に属す梁田河内守に都鄙御一和の義、執り持致すの申し出があり、成氏が年来望んでいた事であった(松陰私語)
文明10(1478)	・足利成氏は、翌年正月2日武州成田へ御旗を廻され... (松陰私語) ・3月、河越より浅羽陣へ差し懸かり、追い散らし候の間、景春は成田御陣へ参り、千葉介と相談、馬を返して羽生峯に取り陣候。同十九日小机より同名図書助の一勢を相添え、河越へ越し、翌日二十日羽生陣へ向かい修理太夫馬を寄せる間、千葉介、景春一戦にも及ばず退散せしめ、成田御陣へ逃げ参り候(太田道灌状) ・7月17日に荒川を越し鉢形と成田の間に張陣し候処、夜中に築田中務大輔方より早馬を申す如くんば、上州において御申合され候首尾を以て、上下御一統に候、然れども景春御近辺に候間、御難儀の趣きに候、急ぎ一勢を遣わすべき旨申し候間、未明(18日)に打ち立ち、道灌、景春陣へ馳せ向い候処、退散せしめ候、その際に公方様、利根川を御越え候き、... 道灌は其のまま成田に張陣、... (太田道灌状) * 道灌が鉢形と成田の間、別府陣にいる時、築田中務大輔より古河に帰るため景春を追い払ってくれとの依頼があり、追い払った。この事を別符三河守に話し三河守が成氏に知らせた(推定)
文明10(1478)	・7月19日梁田茂助書状「千葉介(輔胤)方に就く、長尾右衛門(景春)のこと、何もかも打ち捨てて急ぎご報告、即ち披露いたし候のところ、なさられた御書(成氏)候、兼ねての日首尾の働きの如く、誠に御悦喜の由、仰せ出だされ候、ことさら昨日、長尾の行く子細、其方より御申し候間、なさられた御用心、其の故相違無し、ご帰座しますので、ひとえに其の方御忠心故候、此れ等之趣(言おうとしていること)、よくよく拙者申し越すべし由、仰せ出だされ候、仍って此の間無等閑(なおよざりなく)承り候事、真実に候、忝存(かたじけなくぞんじ)候、特に昨日の子細告げ承り候故、公私の御本意、目出満足此の事候、次に杉本御供致し、此の方まで参じられ候、是非無く次第候、伊豆守方帰宅の時分、巨細(こさい:細かく詳しいこと)申すべし候、其の方時宜、御注重く簡要候、恐々謹言」7月19日 中務大輔成助(花押)謹上 別符三河守殿(宗幸)」(別符文書) 「今年公方様古河へ帰城同年両上杉合戦在」(赤城神社年代記) * 上の道灌状から、7月18日未明に景春を追い払ったことを道灌から別符氏が聞いて、別符氏が足利成氏に知らせた。成氏は成田陣で感状を書き、築田成助が副状を書いたと思われる。 杉本、伊豆守の名前しか見えず、成田氏は成田陣に居なかったと考えられる

<p>文明10(1478)</p>	<p>翌年(文明10年)正月2日武州成田へ御旗を廻され、其の御陣中に於いて、去年より以来の長陣故、遠国遠来の陣衆、各々退屈にせし、少しく退散。剰え千葉別駕、長尾伊玄上意に背む来る条、内々古河に御帰座難思い召されらると御無勢の間、御難儀の由殿中の面々の申れ。</p> <p>同7月23日当方へ仰せ出され、以前当方、於いて万代奉じべき、粉骨致し由、申上げされ、定めて其の首尾を以って、当手300餘騎、成田の御陣下に馳せ参上夜半に至る。御馬を出され、当手は大手を固める也、搦手は梁田印東以下御近衆の面々の固め。利根川の瀨の案内は武州玉井に仰せ付けられ、当備えを為し、千葉長尾、凶逆にして、当手は後陣也。上意の上は力及ばず者、乍去る当国の利根河の先陣武州玉井に渡されの事、未代遺恨の次第也と思ひ定めて、而して後陣を打除々々、当手玉井が先勢に打ち加えて彼の手へ給い入れ。利根河瀨端へ打ち寄せ見渡せば比は7月23日未明の比也。河霧深う而て浪間の浅深見分けざるに打ち入り、而して渡しの河中に於いて大音を上げ名乗り、今度利根河先陣は新田松陰軒、譟叫して、而して打ち渡る。</p> <p>其の後、公方様御越彼の瀨に馬を返す、十度計渡し之。夫れ格謹以下少しく河瀨の浪に押し落され、然るに懸寄々々引上々々於いて浅瀨に放すの事数度に及び、公方様御馬を扣(ひか)され、松陰奇特と御詞を懸けられる。</p> <p>其の後当方衆打ち着間、公方帰座。古河観音堂に向って御休息、当方の衆今日の働き御感有るべし、御所詮(究極)也。横瀨雅楽助(国繁)、同名新次郎、松陰軒両三人、御前に於いて塾瓜召されの上、御手を下に移され也。各々希代未間の御感賞、当方萬代の機模(松陰私語)</p> <p>*文明9年12月の上杉側からの「一和の儀」の申し出が足利成氏側にあつてからの一連の諸氏の動きが見えます。文明10年正月2日から古河に帰る7月23日まで成氏は成田陣に居ましたが、帰る時の手勢は松陰が300余騎を出しています。利根川渡河の時に玉井氏の名は見えますが、成田氏の名前は出てきていません。成田氏は成田陣には居なかったように考えます。</p>
<p>文明10年頃</p>	<p>太田道灌入道武州別符張陣之上金山二招上事、以て一書別符道灌陣申遣子細條々事(松陰私語)</p> <p>*これは、足利成氏と上杉方の和睦後に成氏が古河に帰座した後と思われます。金山城にも三日ほど滞在して、松陰と雑談したり金山城の四方を見物したりしています。大仏部直(おおきさいべのあたい)姓成田家系図にあるように、資員の妻が太田左衛門尉資房(道灌祖父)女であり、沙弥道久(別符幸忠)讓状から資員は別符氏の猶子となつた「きくおう丸」と考えられ、兄と思われる家清が別符幸忠の養子、家幸となつて別符氏を継いでおり、姻戚関係があつて、道灌は別符には陣が張りやすかつたように考えます。</p> <p>長尾皎忠(忠景)の三男、成田の養子となり下総守を名乗る(長林寺長尾系図「足利市史」)*推定</p>
<p>文明11(1479)</p>	<p>足利成氏書状「長尾景春、長井六郎要害へ馳龍田注進可有御心得候、顕定致勢仕候者同時相授可致忠節候、忍城用心無油断之様成田仁可相談候謹言 閏九月廿四日(花押)別府三河守(宗幸)殿(別符文書)</p> <p>*この書状は別符三河守に「顕定(上杉)が勢使いするので、同時に相受け忠節致し候」と別符氏に命じています。この文言からしても、足利成氏と別符氏の間、忍城の成田氏がいたということは考えられないと思います。「忍城用心」と言っていますが、もし忍城に成田氏がいたなら、忍城主で別符陣主よりも上位であると思われる成田氏に書状を出してははずで、文言も「可相談候(相談すべく候)」でなく、「被付力候(力を付けられ候)」や「可致勢仕候(勢仕(軍勢を動かすこと)致し候)」が合っていると考えます。また、書状が別符氏に来ていたことから、忍城は別符氏の城であるようにも思えてしまいます。この書状は「忍城にいる成田」とは書かれていないように考えます。</p> <p>*永享12(1440)年に焼かれたと思われる成田館、享徳の乱で忍城を攻略して忍城に成田氏がいたとしたら忍城の名前は「松陰私語」の中に出てくるものと思われますが、そこでは見られません。「太田道灌状」でも忍城の名が見られるのは「忍城用心」のこの足利成氏の書状以降です。この時代に上杉氏の一被官人(松陰私語)であつたと思われる成田氏が忍城にいたと思われる忍氏を単独で滅ぼす力はなかつたように考えられます。また、妻沼の長井氏は享徳16(1467)年の足利成氏書状で別符三河守に従つていたと思われるので、この後の道灌状にも出てきますが、長井六郎要害は「金谷談所」の近くの御嶽にあつたと思われます。ですので妻沼の長井氏(城)を用心する必要はなく、成氏は、「忍城を用心しろ」と、忍城に近い成田氏に忍城の動靜について気を付けるように相談すべしといったように考えます。 黒田基樹氏も近刊の新編埼玉県史の中では、長井要害(城)を御嶽にあつたと見直しているようですが、この時点は一応の和睦が整つた後ですので、忍城の近辺に用心を要する敵はいません。忍城に成田氏が居ても居なくても忍城は用心する必要はなかつたと考えられ、忍城自体が用心の対象であると考えられます。が、黒田氏は用心する敵方は誰かの説明していません。また黒田氏は「松陰私語」や「太田道灌状」に見える「成田陣」を2013年の「鉢形城歴史館歴史講座の戦国時代の鉢形城」の中でも、忍城の事としてしていますが、道興の関東の旅路(文明18(1486))において、「なり田」で初めて富士山を見る(廻国雑記/熊谷市史)とありますので、この頃は「成田」という地名があつたと思われる。</p>
<p>文明11(1479)</p>	<p>景春長井城へ罷移、自其秩父引籠、...先可被取長井候裁由中間、向彼城、11月28日江戸罷立、12月10日金谷談所着陣候時、忍城雑説之由申来候間、不慮越度そうらいては弥々可為難儀旨存、翌日29日久下寄陣、成田下総守付力候之間、彼城無為候、御不審候者、事次如此申段、成田可有御尋候(太田道灌状)</p> <p>*この時に景春は既に秩父に引き籠っていますが、道灌は長井の城を攻めるため11月28日に江戸を立ち、12月10日に金谷談所へ着陣の予定だつたようで、雑説を聞いて久下に陣を張つたようです。もし忍城に成田氏がいたとしても足利成氏方と上杉方は和睦をした後であり、近辺に敵となる勢力はいなかつた。道灌が直接会いに行かなかつたのは、敵でもなく同じ陣営の扇谷の忍城だつたかもしれない、その雑説(忍城用心:成氏書状)のことを多分、道灌が別符の陣で聞いて、久下に陣を張つて動靜を見たものと考えます。 道灌は江戸から別府陣の別府三河守の所を訪ねて、成氏の書状を見せてもらったと思われ、翌日に久下に陣を寄せて、応永2年(1395)の泰員以後見えなかつた下総守として登場した長尾家からの養子の成田陣の顕泰(下総守)に陣様を見せて力付けし、忍城の動靜を見て、「彼城無為候(彼の城は何もなさないでしょう)」と書き留めたと思ひます。忍城に成田氏がいたなら直接に会いに行つたと考えるのが自然で、行かなかつたのは成田氏からも見える忍城の動靜の事で、「成田可有御尋候(成田にお尋ね有るべくしてください)」と書いていますと考えます。また、熊谷市史の「長井系図」では実盛の子の一人、景房までしか見えませんが、「斎藤家略系譜」に、「斎藤實永(實仲)、住武州児玉郡御嶽、延元二年十二月(1337)利根川二流死」とあり、景房の孫に御嶽に居住した長井氏が見え、道灌が長井城攻めに向かつた金谷談所は景春が本拠とした鉢形城の近くにもあり、御嶽の長井氏が居城する城であつたと思われ。これは熊谷市史とは違い黒田氏と同じですが、長井六郎要害(長井城)は御嶽に在つたと考えられます。</p> <p>別符氏と妻沼の長井氏は姻戚関係もあり、享徳の乱開始後も別符氏と一緒に成氏に従つており、成田、忍城近くにはその長井氏があり、景春の籠つた長井六郎の要害が妻沼近辺にあつたとは考えられない。</p>

長林寺長尾系図(足利市史)



長尾氏と成田下総守



成田家は道久(別符幸忠)讓状や大私部直姓成田家系図,成田系図,別符系図,東別符嫡家系図を読み解いていくと、永享2年(1430)頃に何か家が衰退するようなことが起こり、家時(実は成田泰員かも)長男の家幸が別符氏の養子となり、次男と思われる資員が家を継いだと見られますが、その資員(菊丸)はなぜか別符氏の猶子となったようです。

系図上では資員、顕泰、親泰と跡を継いでいますが、別符氏の猶(なお)子のため、別符氏の方が上位であったように思われます。

その後、永享12年(1440)には臈鼻性順と長尾景仲に成田館を攻められ成田館は壊滅されてしまったと思われま。その時に資員は別府に移り住んで、少し落ち着いてから成田に館を造り直したと考えま。その成田氏が、享徳の乱の中で忍城を奪い取れるほどの力ができたとは考えにくいです。

下載の政氏の「忍城攻め」の書状の時に、忍城に成田氏はいなかったが、既に忍城に成田氏がいたとしている黒田氏は、鎌倉大日記の「成氏の忍城から古河への帰座」の書き込みを「政氏」の名に変えたり、十月二十日付上杉顕定書状を荒川を挟んで扇谷定正と対峙したと解釈(7の忍城,岩付城は誰が築城したかで説明)している。

そのため、新しい文書が見つかるたびにその解釈に苦慮しているように思いま。

足利政氏書状 芹沢文書(黒田氏も延徳2年頃と見ている)

○四六一 足利政氏書状(切紙) 文書  
 (切封綴引)  
 蓮沼三郎事、忍城實之時、於御馬前、被疵、于今不平愈候、然間、為養生令下向候、懇加療治候者、可然候、猶可存其旨候、謹言、  
 九月十七日  
 芹沢土佐守殿  
 (花押)